



「卓上静物」 昭和28年

四 「書」・精神の充実

「僕は油絵も、日本画も、字も、一寸かくが、油絵をかく時が、一番らくで、日本画をかく時は、それよりは息ぐるしく、字をかく時が一番くるしい。息がつまる。字が一番、主観的で、実力的だ。精神をこめてゝないと字は死んでしまうし、精神がこもった時、一息でかゝないと字がつくったものになる。字をかく時は一心そのものになることを僕は何となく心がけることにしている。しかし、その一心は融通無碍でありたい。形にはとらわれないが、しかし形を忘れ切りもせず、形に即して精神が充実して流れることをのぞんでいる。」

(実篤「書に就ての雑感」より)

五 響きあう絵と讃

実篤の絵には、「君は君 我は我也 されど仲よき」といった短い言葉(画讃)が書き添えられたものがたくさんあります。それは、誰にでもわかる単純そうな言葉ですが、実篤の人生観がにじみ出た味わい深いものです。そして、絵と言葉(文字)がお互いに生かしかい、響きあって、独自の世界を作り出しています。

日生と星とが讃嘆しあうよう
に山と山が讃嘆しあうよう
に人間と人間が讃嘆しあ
いたいものだ

實篤

「星と星」 昭和35〜40年

人間のまごころや、成長しようとする意志の素晴らしいを思い、人間を愛する実篤の真情がにじみ出ている詩句。



「鳥三つ」 昭和43年
文殊菩薩は知恵をあらわす仏様とされています。

雨が降った
それはいちだろ
う本が読める

實篤

「雨が降った」 昭和35〜40年

心を柔軟にして何事も思いのままにする裡にも似た心境。

もっと知りたい 武者小路実篤

実篤の書画

実篤は、40歳のころから90歳で世を去るまで、熱心に絵を描き続けました。また、独特な味わいのある書にも力を注ぎました。一見、誰にでも描けそうな素朴な実篤の書画、しかし、それは心にしみる美しさ、温かさ、そして、人々を元気にさせる不思議な力を持って私たちに魅了します。

一 懸腕直筆

十代のころに実篤は、叔父の勘解由小路資承から「懸腕直筆」という筆づかいを学び、終生これを守り通しました。筆をまっすぐに持って、腕をあげ、筆の穂先が常に線の中央を走る書き方です。この筆づかいによって書かれた実篤の書画は、器用に上手に見せようという気持ちとは無縁で、気品のある美しさに溢れています。



現・調布市若葉町、自宅の画室で筆をとる実篤。描くものも前に置き、しっかり見て描いた。(昭和36年)

二 真実を求めて

「静物をかく時も、山をかく時も、人物をかく時も、自分は同じく真実を求める。形の上の想像力の教養の不足している自分は、真

実はいつも、自分の想像しているよりは、力づよいし、微妙であり、ごまかしがたい。必然から発生している。それを出来るだけ表現したいと思っている。」

(実篤「自分の画について」より)

三 なぜ野菜を描く

野菜の画に

実篤

こんなものをかいて何になる
そう言う人があるかも知れない
しかしかくのが楽しく
見るのが楽しい人があるから仕方がない。

自然から与えられた
人間の食物、
人間の喜び、
私はそれを尊敬する。

君知るか 野菜の美
君知るか 根の美
美を知ることの何ぞ嬉しき。

(略)
我は生命の内に満つるものを愛す
生命内に満つるものは美なり。

(略)

(「無車詩集」より)

君は君
我は我也
されで
仲よ
き



實篤

野菜画「君は君…」昭和35～40年
実篤は、論語にある「和して同ぜず」という
言葉なども好んで書いた。